

保育者のとらえる子どもとの信頼感

C2H801 岡本 かおり

主査：仲本美央 副査：佐久間路子（指導教員） 江上園子 無藤隆

1. 問題と目的

保育者と子どもの信頼関係は、保育において欠かせないものである。幼稚園教育要領解説（2018）では、子どもは信頼関係によって安心感をもち、さらに、保育者による適切な援助により、子どもが自分の力で様々な活動に取り組むことができること、それは、自立へ向かう子どもの姿であることが示されている。保育所においても同様で、保育所保育指針解説（2018）では、信頼関係を抛りどころとしながら子どもの主体性や生きることへの意欲が育まれていることを保育士等が心に留めながら、子どもと関わることを示されている。つまり、信頼関係を基に保育を展開することが、保育者に求められているのであり、子どもとの信頼関係を構築することは保育者の専門性の一つといえるであろう。しかし、保育者はどのように信頼関係を感じ、保育を展開しているのかについては明確ではない。日々の保育において、信頼関係は保育者の視点でとらえられ、保育は展開されているのであり、保育者の視点が意味をもつものと考えられる。それは、おそらく保育者にとって、保育をする上での重大な頼りとして子どもから信頼されているであろうという感覚が意味をなすからではないだろうか。前述の通り、信頼関係は、子どもの自立、子どもの主体性や意欲等に繋がる特徴をもつ。そうであるならば、保育者の視点からとらえられた子どもとの信頼関係は、子どもから頼られているという感覚だけでなく、子どもの成長していく姿や今後の成長に繋がる可能性を含めた意味合いをもつ成長可能性と考えられるのではないだろうか。本研究では、保育者がとらえる信頼関係に着目することで、子どもとの間に形成された信頼の感覚だけでなく、信頼関係を基盤とした子どもとの関わりや、それらがもたらす子どもの成長可能性を、保育者がどのようにとらえているのかという点も含め検討を行う。

本研究において、次の4点を検討することを目的とする。第一に、保育者は子どもとの信頼関係をどのようにとらえているのか、信頼関係を構築することで変化はみられるのかを検討する。第二に、子どもから信頼されていることを実感した時の子どもの姿、子どもから信頼される保育者の関わりは、保育キャリア（保育の経験年数において、3年以内の「初任」/4年から15年の「中堅」/16年以上の「ベテラン」）、園種（保育所/幼稚園）、子ども年齢区分（3歳未満/3歳以上/3歳未満と3歳以上の両方）によって異なるのかを検討する。第三に、信頼感をと

らえる保育者の内面の特徴を検討する。第四に、信頼関係に対する意識は保育者と小学校教諭で異なるのかを検討する。

2. 本論文の構成

本論文の構成を図 1 に示す。

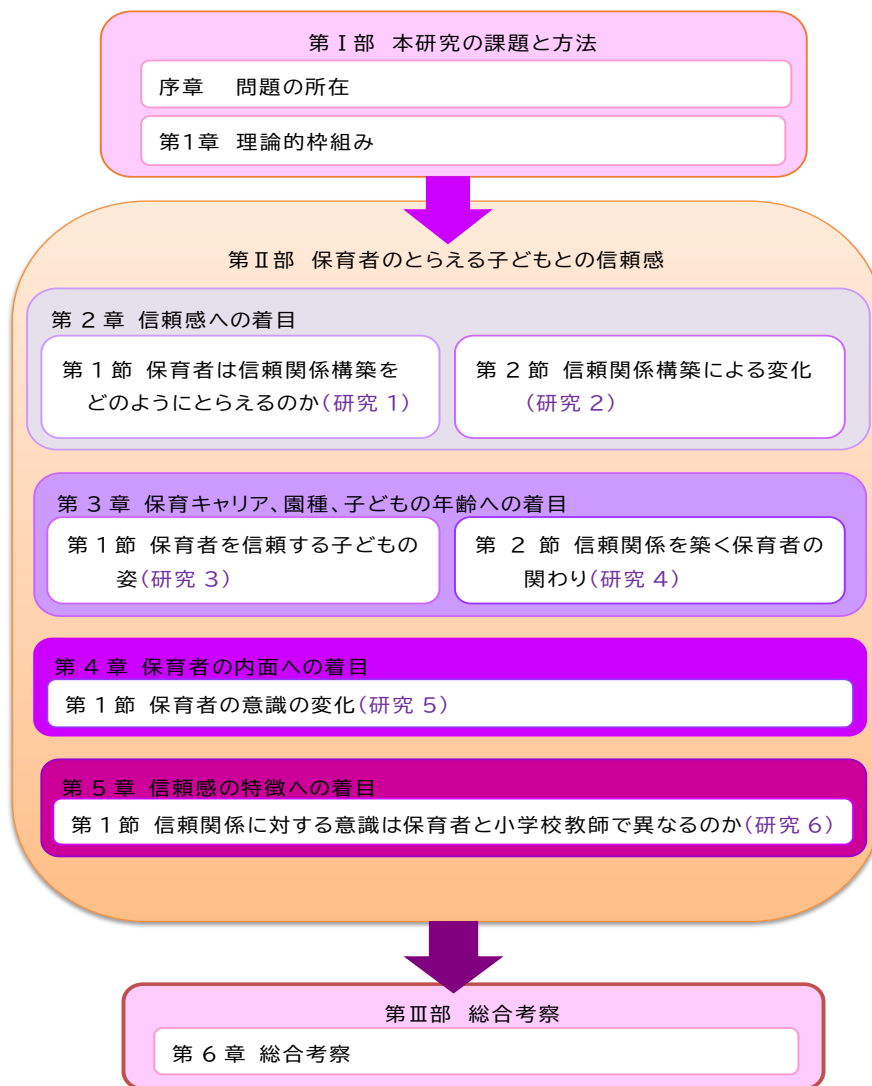


図 1 本研究の構成

第 1 章では、1950 年代から現在にかけて幼稚園教育要領および保育所保育指針で示される「信頼関係」を中心に解説書等を取り上げて概観し、さらに、愛着関係、保育キャリア、国外との比較、児童と小学校教師の関係について整理した。第 2 章では、研究 1 で、保育者は子どもとの信頼関係をどのようにとらえているのか、研究 2 では、信頼関係を構築することで変化はみられるのかを保育者

の語りから検討する。第3章では、研究3で、子どもから信頼されていることを実感した時の子どもの姿、研究4で、子どもから信頼される保育者の関わりについて、それぞれ保育キャリア、園種、子ども年齢区分によって異なるのかをアンケート調査を用いて検討する。第4章では、研究5で、信頼感をとらえる保育者の内面の特徴を検討する。第5章では、研究6で、保育者（幼稚園教諭と保育士）と小学校教師の語りから、信頼関係に対する保育者（幼稚園教諭と保育士）の意識を小学校教師の意識と対比することで、保育者のとらえる信頼感の特徴を検討していく。第6章では、総合考察として、信頼関係を構築することの意義を明らかにしていく。

3. 結果

研究1（第2章）では、保育経験の長い保育者（保育士と幼稚園教諭各10名）が信頼関係構築をどのようにとらえるのかを検討した。分析の結果、「信頼関係を築いた子どもの姿」、「子どもから信頼される保育者の特性」、「子どもを信頼する保育者の特性」に関して、幼稚園教諭と保育士に共通で認識される特徴が明らかになった。「信頼関係を築いた子どもの姿」では、子どもの姿として、【保育者に話しかける】【保育者に応答する】【保育者に寄る】が示された。また特に、非言語的コミュニケーションである【保育者に寄る】は、言葉の発達が未熟である乳幼児期ならでは子どもの姿の特徴であることが示唆された。「子どもから信頼される保育者の特性」では、保育者の関わりとして、【子どもを受け止める・共感する】【子どもを知る・子どもの気持ちを考える】が示された。「子どもを信頼する保育者の特性」では、【信じる】が示された。これらの保育者の関わりは、『幼稚園教育要領解説』（文部科学省, 2018）で示される保育者の態度と一致するもので、実践の中で培われた保育者のとらえる子どもと信頼関係を築く態度を確認することができた。

研究2（第2章）では、保育経験年数の長い保育者（保育士と幼稚園教諭各10名）の語りの分析から、信頼関係構築による変化を検討した。その結果、子ども・保育者・保護者に関して肯定的変化がみられるととらえていることを明らかにした。子どもと保育者の信頼関係構築が、子ども・保育者・保護者といった多次元的な影響を及ぼすこと、また、これらの変化において、保育者間に共通の認識が存在することが示された。特に、子どもとの信頼関係構築は、保育者の自己充実感や実践態度にまで影響し、さらに、それらが子どもの変化や保護者の変化の認識と関連することが示された。子どもとの信頼関係構築が、子どもの変化や保護者の変化と関わり合いながら、保育者自身の内面や保育実践において肯定的な影響をもたらすことを保育者がとらえていることを示した。保育の仕事に対する自

信や充実感をもち、保育の専門性を向上し続けようとする態度は、保育の専門性を高める上で重要な保育者の実感になり得ることを考察した。

研究 3 (第 3 章) では、保育キャリア、園種、子ども年齢区分に着目して、子どもから信頼されていることを実感した時の子どもの姿を示した。その結果、保育キャリアと園種、子ども年齢区分によって、子どもから信頼されていることを実感した時の子どもの姿に違いがみられることが示された。具体的には、半数以上の保育者は、子どもから信頼されていることを実感した子どもの姿として、言葉や行動による保育者への接近態度をあげていた。多くのベテラン保育者があげたのは、保育者に甘える子どもの姿、保育者の存在や励ましで頑張る子どもの姿や成長した子どもの姿であった。また、幼稚園よりも保育所の方が、抱っこを求める、保育者の名前を呼ぶ、笑顔の子どもの姿をより多くあげていた。さらに、抱っこを求めるは、子どもの年齢が 3 歳未満の方が多かった。

研究 4 (第 3 章) では、岡本(2011)及び岡本・浜崎(2013)の「保育者の子どもへの関わり行動尺度」を用いて、保育キャリア、園種、子ども年齢区分による信頼関係を築く保育者の関わりを検討した。その結果、保育者は、一人一人の子どもの心に寄り添い、内面まで理解して関わろうとする保育者の姿を示す「把握的関わり」と、子どもに対する親しみをもった関わりを示す「親和的関わり」の両者を実践していることが示された。また、保育キャリアと園種によって、信頼関係を築く保育者の関わりに違いがみられた、「把握的関わり」に関しては、保育キャリアの初任において、幼稚園は保育所に比べて得点は高かった。また、保育所の中堅やベテランは、初任に比べて得点が高かった。

研究 5 (第 4 章) では、保育士(42 名)と幼稚園教諭(45 名)を対象に半構造化面接法による語りの分析から、子どもとの信頼関係構築に伴う保育者の考えや意識を検討した。その結果、主な特徴として、ベテランは、信頼関係を多面的にとらえていること、信頼関係を構築する子どもの姿や保育者の関わりは、信頼感に伴い醸成されていくこと、信頼感に伴う保育者の意識の変化は保育実践に反映されていること、保育者がとらえる信頼感の多くは保育経験に影響され、その際、初任においては、保育経験者などによる助言が意味をなしており、ベテランにおいては、個人的経験を含めた多様な経験が信頼感に影響していることが示された。また、保育者は信頼関係と子ども自らの成長可能性の繋がりを強くとらえており、信頼関係構築において、子どもがありのままの自分を出すこと、保育者が子どものネガティブな面もポジティブな面も含めて、子どもを受け止めることの重要性を認識していることが特徴として示された。

研究 6 (第 5 章) では、「信頼関係を大切とする理由」について、小学校教師の語りと保育者の語りの分析を比較検討することで、保育における信頼感の特徴を

示した。小学校教師は、信頼関係によって学級経営が上手くいっているかどうかをとらえており、全てのキャリアにおいて、共通した認識であることが示された。一方、保育者においては、信頼関係をその子個人の成長に結び付けてとらえており、子どものポジティブな面・ネガティブな面において、ありのままの自分を出すことを子どもの成長における重要な子どもの姿としてとらえるという保育者もつ認識の特徴は、小学校教師においてはみられず、保育者と小学校教師の信頼関係をとらえる意識に違いがみられることが示された。

4. 総合考察

本研究で得られた主な成果を3つ示す。第一に、信頼感をとらえながら保育は向上することである。研究1では、保育の経験年数が長い保育者は信頼関係を構築することを、【保育者に話しかける】【保育者に応答する】【保育者に寄る】といった子どもの姿から捉えており、また同時に、【子どもを受け止める・共感する】【子どもを知る・子どもの気持ちを考える】【信じる】といった保育者の姿からもとらえていた。さらに、子ども、保育者、そして保護者も含め、それぞれが単独に変化するのではなく、子ども、保育者、保護者が関わり合いながら変化がみられると保育者がとらえていることを明らかにした。子どもとの信頼関係構築は、子どものためだけのものではなく、子ども、保育者、保護者において肯定的変化をもたらすことを保育者が認識しており、とりわけ、保育者においては、保育者の自己充実感や実践態度にまで影響し、保育者自身の内面や保育実践において肯定的な影響をもたらすことを示した。このような保育者であることや保育の仕事に対する自信や充実感をもち、保育の専門性を向上し続けようとする態度は、保育の専門性向上に繋がる信頼感になり得るもので、保育者は信頼感をとらえながら、保育の質を向上させていくことが示唆された。

第二に、保育者のとらえる子どもとの信頼感の内実を具体的に示すことができたことである。これまで保育における信頼関係の重要性が指摘されてきた。保育における信頼関係の特徴としては、「信じて頼り合う間柄」（岸井, 1989）や「子どもが保母を信頼するとともに、保母もまた子どもを信頼する状態」（平井, 1990b, p. 83）」といった相互関係であることが示されていた。また、子どもが信頼する保育者の特性として、思いやりがあること、そのような思いやりのある保育者によって、子どもの情緒は安定すること等が示されていた（平井, 1990）。これらの先行研究で示されていることに加え、さらに本研究においては、保育者が、信頼関係を子ども自らもつ力が伸びていく成長と結びつけてとらえていることを見出した。本研究では、保育者が子ども自らもつ力の成長可能性を感じ取りながら、子どもへの関わりを実践しており、そこには、保育者がとらえる信頼感

が基盤となり、働いていることを示した点は、本研究の成果といえるであろう。また、保育者がとらえる子どもとの信頼関係とは、ネガティブな時もポジティブな時も含めて、子ども自らがもつ力が伸びていく成長のために存在する関係性であることが示されたといえるであろう。

第三に、保育者は、信頼感を頼りに、子どもの成長や望ましい子どもの姿と保育者としての適切な関わりをとらえ、自身の保育行為を振り返り、考えながら保育を展開していることが示唆された。保育における信頼関係は中核であり、信頼関係を感じ取ることができなければ、子どもに対する関わり方や保育の方向性は定まらず、保育を実践していくことは困難である。ここに、保育者が信頼関係を構築することの意義があるといえる。

信頼関係は、保育者の内面と共に変容していくものであり、保育の質の向上に繋がる重要な感覚といえるであろう。本研究では、信頼感が、個人の中で変容していくことが示された。保育者が自身の信頼感を振り返り、その変容過程を可視化していくことで、保育者としての成長や課題を見出すことができると考える。そして保育者が日々の中で感じている重要で当然のものとして存在する信頼感こそが、実践の中で培われてきた保育者の実感であり、保育者の専門性といえるのではないだろうか。

本研究における今後の課題として、信頼感が形成されていく過程について、日々の保育に即してその実態を明らかにすることや、省察する力などの保育者個人の要因に着目して、保育者がとらえる子どもとの信頼感を検討していくことが必要と考えられる。